F－10 家庭生活の基本構造についての一考察（二）

東京文化短大　松岡明子

1）．昨年度発表せる「家庭生活の基本構造についての一考察」（一），においては，われわれの"日常生活"を，ヘーゲル的な意味を含みつつ，「具体」的に把握することを志した。それがために，新しい視座すなわち生活学的な立場というものを仮説し，その基本構造の探索を試みた。すなわち，われわれの家庭生活において，その日常性（ハレとケ・聖と俗）のなかに，現われる生活現象のうち，「生活行動」に焦点をしぼり，そこにかくされている諸問題の所在・前後関係（context）を解明すべく，表層構造の図式的展開を試案した。2）．次いで，表層構造に現われる諸問題が，生の代謝過程すなわち"生活過程"のなかに，いかに順序づけられるかを，もっとも基本たるべき生活行動を通じ，窮極的にはその背後において，それを支えるところの深層構造への接近に立ち向う。その主体としての人間が，どの様な生活行動を行っているか，換言すれば現存在の様態を探求するために，われわれの思考操作概念としての，「基本構造」においては，生活行動を，家庭生活における全体の動きの中に分類し把握した。3）．今回は，主としての人間の，日常性のなかの生の存在様態のうち，もっとも基本的な「生活行動」を，1．行為，2．行動，3．活動，4．動作（動きとしての），5．動作（姿勢・体位としての），6．反応～反射という生活学的カテゴリーにおいて，具体的な行動として，1～14項目の中にとらえ，その部分項目としての「家事する」，「家政する」ということを，統一者として主婦がいかに"主婦"するかを明らかにすべく探索を試みたものである。